

笠卒都婆

季は	地は	後	前
春	大和	シテ ワキ 前に同じ	シテ ワキ 旅僧 老人

「春を心のしるべにて。く。憂からぬ旅に出でうよ。

詞 「かやうに候ふ者は。諸国一見の者にて候。我此程

は都に上り。洛陽の寺社に参りて候。又是より南

都七堂に参らばやと存じ候。

道行

「都より。又旅立ちて井手の里。く。今日瓶の原泉川。河風霞む春の空。影ものどかに廻る日の。南の都こゝなれや。はや奈良坂に着きにけり。

シテ次第
「苦しき老の坂なれど。く。越ゆるや程なかるらん。

サシ
「花は雨の過ぐるによつて紅まさに老いたり。柳は風に欺かれて緑漸く垂れり。寒林に骨を打つ靈鬼。泣くく前生の業を恨み。林野に花を供する天人。返すぐも機性の善を喜ぶなるは。只順逆の因果なるべし。人間万事塞翁が馬。何か法ならぬ。

げに隔てなき世の習ひ。

歌

「老の鶯音もふりて。く。身にしむ色の消え返り。
春の日の影ともに。遅き歩をたどり来て。通ひな

れたる奈良坂や。花の木陰に着きにけり。く。

ワキ詞
「如何に是なる翁に尋ね申すべき事の候。

シテ詞
「何事にて候ふぞ。

ワキ
「是は此処はじめて一見の者にて候ふが。仏閣の有様
目を驚かしてこそ候へ。

シテ
「げにく我等は明暮日馴るゝ身にだにも。此奈良
坂にあがりて見れば。目を驚かすばかりなり。殊
更始めての御事ならば。さこそと思ひやられて候。
見え続きたる仏閣御尋ね候へ。あらく教へ申さ
う。

ワキ
「先づ是より東にあたり大きな御寺の見て候ふ
は。承り及びたる大仏殿候か。

シテ
「さん候あれこそ三国無双の大伽藍。東大寺大仏候

よ。

シテ
「あれは遍昭が歌に。浅緑糸よりかけて白露を。玉
にも貫ける春の柳と。西の大寺の柳をよめると。
此言がきにもしるしたる。西大寺にて候。

ワキカール
「衣ほすなる佐保の川の。流れにつゞく寺は如何て。

シテ
「あれは其かみ唐の龍光法師が作り置きし。十一面
の二仏像。法華寺といへる尼寺なり。

ワキ
「さて又南に当りつゝ。見えたる寺の名は如何に。

シテ
「法相流布の興福寺。山科寺とも申すなり。

ワキ
「さて其末に続きつゝ。見えたる寺の名は如何に。

シテ
「あれは春日の御綸旨の使に。下り給ひし在中将の
御建立。勤の声のふだいじよ。

ワキ
「さて猶遠く見えたるは。

シテ
「今日も命は知らねども。

地
「飛鳥の寺の夜の鐘。く。鬼ぞ撃くなる恐ろしや。

さても音に聞きし鐘の音は。是ぞと思ひ。入相

もすさましや。げにや古へに。なりにし奈良の都路も。春に帰りて花ざかり。八重桜木は面白や。
く。

ワキ詞
「さらば御暇申さうするにて候。

シテ
「暫く是なるしるしに向ひ。回向をなして御通り候へ。

ワキ
「回向の事は安き間の事去りながら。誰と心ざし候ふべき。

シテ
「重衡を御回向候へ。

ワキ
「重衡は此処にて果て給ひて候ふか。

シテ
「さても重衡は。一の谷にて生捕られ。関東下向とありしが。南都の訴証強きによつて。あの木津川にて切られ給ふ。さしも栄花の門を開き。一家累葉を連れし身なれど。一度は栄え一度は衰ふる事。まのあたりなる有様なり。

地
「朝に紅顔ありて。世路に楽しむといへども。夕べ

には白骨となつて。郊原に朽ち果てし。木津川の

波と消えて。あはれなる跡なれや。

地 「さては平の重衡の。其名を聞くも痛はしや。御跡
いざや弔はん。

シテ 「跡をとふ人しなければ春草の。かげ恥かしや露の
身の。消えかへり亡き跡の。姿見ゆるぞ悲しき。
地 「げにや姿の生ける身は。いつの時をぞ春の木の。

シテ 「その重衡の幽靈は。

地 「魂は去れども。

シテ 「白髪の。

地 「霜の翁と御覧するは。我亡心の来れりと。夕べの
月の影さすや。三笠山はあれぞかし。是も又笠卒
都婆の。花の陰に隠れけり。く。(申入)

「夢の如くに仮枕。く。傾く月の夜もすがら。か

の重衡の御跡を。逆縁ながら弔ふとかや。く。

「故郷と。なりにし奈良の都路も。春を忘れず花は

咲きけり。それは天子の御詠なり。我はもとより
数ならぬ。簾代衣春来ても。ゆたかならざる修羅
道の責め。あら闇浮恋しや。

一セイ
「奈良坂の。此手に執るや梓弓。

地
「八十氏人のかずくに。

シテ
「名をこそ流せやたけの人の。

地
「心の雲も晴れゆく月の。夜声の御法の有難さよ。

シテ
「さても重衡は。一の谷にて生捕られ。京鎌倉を渡

されしに。南都の訴証強きに依つて。あの木津川
にて切られんとせしに。近藤左衛門の尉知時とい
ひし者。重衡最期を見んとて。貴賤立ち囬みし中
を。かきわけく來り。如何に重衡。知時こそ
参りて候へと申せば。日頃のなじみなれば来るは
嬉しく。願はくは最期の際に。仏一体をがまんと
有りしかば。安き間の事とて。あたりに有りし木
仏を一体むかへ。河原の砂に据ゑおき。見れば幸

にも阿弥陀にてぞおはしける。其時知時が着たり

ける。直垂の袖のくゝりを解き。仏の御手にかけ。

中将に控へさせ奉り。重衡よりくみ渡りぬれば。

地「合掌し弥陀仏に向ひて。懇に申させ給ひけるは。

クセ「伝へ聞く調達が。三逆を作りけん。八万蔵の聖經。亡ぼしたりし恶心も。天王如来の記別にて。罪業まこと深しといへども。聖經值遇の順縁にて。却つて得道の。因となりにけるとかや。今重衡が。

逆罪を犯す事。全く愚意の為すに無し。世に随へる理りなり。生を受くる者誰とても。いかでか父の。命をば背かんや。心中仏陀の。照覧もあるべしや。只三宝の。教戒を受くる心なり。

シテ「一念弥陀仏。則滅無量罪と聞く時は。只今唱ふる声の内。涼しき道に入る月の。光は西の空に。至れども魄靈は。猶木の下に残り居て。こゝぞ閻浮の奈良坂に。帰り来にけり三笠の森の。花の台は

是なれや。重衡が妾執を助け給へや。

シテ
「あら恨めしや。たまく閣浮の夜遊に帰り。心を
澄ます所に。又瞋恚の起るぞや。あれ御覽ぜよ旅
人よ。

ワキ
「げにく見れば東方より。ともし火あまた数見え
たり。あれは如何なるともし火やらん。

シテ
「あれこそ例の名にしあふ。春日の野守の飛火なり。
ワキ
「げに飛火とは聞き及びたり。何によりこの飛火や

らん。

シテ
「昔他国の軍おこり。多くの軍兵あの春日野に籠り。
夜なくともす篝火の。松明の火の働くが飛ぶや
うなればとて。飛火野とこゝを名づけたり。又修
羅道の折を得て。あの春日野にともすぞや。あれ
追つ払へ春日野の。

地
「野守は無きか出でゝ見よ。く。今いく程ぞ修羅
の夜軍。明けなば浅間山。燃え焦るゝ瞋恚の焰。

焼狩と見えつるは。

シテ「武藏野を焼きし飛火のかげ。

地「野守の水を照らしゝは。

シテ「鏡にうつる胸の焰。刃のまつさきを磨きしは。

地「すは一刀の剣の光。

シテ「刺し違へ切り払ふ。

地「焰は剣の雨と降つて。春日野の草薙や。村雲の剣
もかくやらんと。見えて飛火のかづくに。山河

を動かす修羅道の。く。苦しみの数は重衡が。
瞋恚を助けてたび給へ。く。